WSC：World Standardization Cooperation

ICTコンファレンス（WSC主催）の報告

WSC主催のコンファレンス概要

ジュネーブにある国際機関の中心地である欧州国連本部前の国連広場周辺には、3つの国際標準化機関、すなわちIEC、ISO、ITUの本部が隣り合っています。これら3機関の上級役員、事務局が国際標準化について討議するWSC（World Standardization Cooperation）は、持ち回りでそれぞれの得意分野からテーマを選んでコンファレンスを開催しています。

今年はIECの担当で、「ホームネットワーク」をテーマに選び、昨年5月から本格的に準備を開始し、2006年2月2日～3日に「Digital technologies in the home」というタイトルでコンファレンスを開催しました。参加者は、標準化の専門家を少なくし、関係企業の技術役員クラスを中心に、招待ベースで90名以上となりました。また、国際標準化をビジネスに役立てる糸口となるように、プログラムを構成しました。会場はこの3機関に隣接し、最近改装されたジュネーブ市立国際会議場（CICG）で行われました。（写真1参照）

コンファレンスの特徴と構成

筆者が国際幹事を務めているIEC TC100（オーディオ、ビデオ、マルチメディアシステム及び機器）は、IECの中でもICTに直接関係する唯一の技術委員会です。2005年5月から始まった運営委員会、10月からのプログラム委員会に参加し、コンファレンスの構成、講演者の選定、招待者のリスト作りを行いました。

写真１．会場となったジュネーブ市立国際会議場

IEC中央事務局が中心となり、ISO/ITU-T事務局に加えて、ISOからはISO/IEC JTC1議長、ITUからJoint Coordination Activities（JCA）for home networking議長（ITU-T Study Group（SG）15副議長）が中心的に参加しました。

プログラムは1日半で構成され、3つのキーノートスピーチ、6つのセッションで18のプレゼンテーションがあり、それぞれのセッションではプレゼンタがパネリストとなり、パネル討論が行われました。また、会場からも積極的な発言があり、活発な議論が行われました。

日本からは、KDDIの村上仁己常務執行役員がキーノートスピーチを行い、日本のメーカ、通信事業者から6つのプレゼンテーションがありましたが、それぞれ全体の1/3となり応分の寄与をすることができました。

筆者は、セッション4（情報家電機器管理）の司会を担当するとともに、セッション6（規格団体レビュー）にも、TC100の国際副幹事である江崎正氏（ソニー）とともに参加しました。

また、最後のセッションでは、会場からの参加者も含めて活発な討論が行われました。今後のICT分野における国際標準化推進のために、今回のコンファレンスと同様の情報交換が必要であることが確認されました。

近い将来、到来が予想されるユビキタス情報社会では、家庭内の様々な電化製品、PC、情報機器など、様々なデバイスがネットワークでつながってきます。そしてその中を、情報・コンテンツ・制御データが飛び交うことになります。こうした状況において、消費者は何を期待し、また産業界は市場の潜在ニーズをどのように捉え、システムを具現化していくのか。誰もが容易に使えるための標準化はいかにあるべきか、そのために今克服すべき課題は何か。コンファレンスではこれらについて議論され、今後の国際標準の方向性を探る非常に有意義なものとなりました。

各セッションの概要

初めに、今回の当番機関であるIEC事務総長のAmit氏が挨拶し、次いでISO事務総長及びITU-T局長が挨拶して、コンファレンスがスタートしました。

IEC TC100 Secretary（国際幹事）
平川　秀治
（株式会社 東芝　技術企画室 主監（標準化担当））

写真2は、改装後初めて使うことになった会議室での、今回のコンファレンスの様子です。

1キーノート1：

British Telecom（BT）から、将来は光アクセス系PON（Passive Optical access Network）が主流になると予想しており、そのネットワークを有効に活用するためには映像信号のサービスが必要不可欠であるとの話がありました。また、現在の15,000加入のローカル電話局はラック900本で、列車を運転する800kW以上の電力を消費しているのに対して、次々世代のLong Reach PONでは1ラック以下で収まり、電力も100W以下となると実例での紹介があり、興味深い内容でした。

2セッション1：家庭までのアクセス系

DSLの活用についてはDSL Forumから、光アクセス系についてはITU-T SG15議長の前田洋一氏（NTT主幹研究員）から、電力線通信についてはCEPCA（日本の各社も関係しているフォーラム）から、そしてケーブルテレビ網のICTへの活用についてはJEITAケーブルシステム標準化委員会の前委員長の松本檀氏（NECマグナムコミュニケーションズ・エキスパート）からプレゼンテーションが行われました。

3セッション2：家庭内ネットワーク

IEEE 802.11、802.15などの家庭内でも使える無線系、同軸ケーブルや電話線を使うHome PNA（Phone Network Alliance）などの有線系のプレゼンテーションがありました。加えて、最新のIEEE 802.11n、UWB、無線HDMIなどのマルチメディア無線系について、米国三菱電機研究所のJin Zhang女史からプレゼンテーションがありました。

写真２．「ICTコンファレンス」会場の様子

4キーノート2：

KDDIの村上仁己常務執行役から、日本の高速アクセス系は非常に安価であること、映像・電話・データのTriple Playに携帯を加えたサービスが行われていること、これらのサービスにはデジタル権利保護管理（DRM）が重要であることが説明されました。

5セッション3：コンテンツ管理

広帯域宅内ゲートウェイについてTIから、ホームサーバでのコンテンツ管理の重要性について、東芝デジタルメディア・ネットワーク社の技術責任者である神竹孝至氏から、ホームゲートウェイイニシアティブについてテレコムイタリアから、Digital Living Network Alliance（DLNA）議長であるスマイヤーズ氏（米国ソニー）からは、DLNAでDRMをどのように扱うかについて、それぞれプレゼンテーションがありました。

6セッション4：情報家電機器管理

DSL端末の遠隔機器管理を規定しているTR-069についてDSL Forumから、ECHONETフォーラムの運営委員長である成田隆保氏（東芝）からECHONETによる家電品の制御について、KONNEXについてはそのCENELEC規格であるEN50090を中心にシーメンスから、松下電器産業（株）AVコア技術センター長の岡村和男氏からはデジタルTVとホームネットワークというタイトルで、デジタルTV受信機を中心としたシステムについてプレゼンテーションがありました。

7セッション5：ベストプラクティス（以降2日目）

キーノート3として、前出のDLNA議長からその活動内容が紹介されました。現在、272社が加わる組織となっており、最近では認証機能も持ち始めていること、バージョン1.5の文書が間もなく承認されること、が主なポイントでした。

パネリストからのプレゼンテーションでは、最初に350万台の出荷実績があるECHONETの活動について、フォーラムの技術副委員長である安東宣善氏（日立製作所）から紹介がありました。

その他、このセッションでは、世界各国で採用されているデジタル放送方式DVBについて欧州放送連合（EBU）から、画像、音声圧縮方式が国際的に広く採用されているMPEGの活動について、イタリア・トリノ市在住のキャリオーネ議長が自ら参加して紹介しました。

8 規格団体レビュー：

ISO/IEC JTC1 SC25国際幹事、IEC TC100国際幹事（報告者）、国際副幹事（ソニー・江崎正氏）、ITU-T SG15副議長、SG9副議長がパネリストとして、またISO/IEC JTC1議長が司会として参加し、ICT技術に関係している標準化グループ役員によるパネル討論が行われました。その後、フロアからも参加があり、非常に活発な討論となりました。

今回のイベントについては、有意義であったとの意見が多く出されました。今回と同様の会議を定期的に開催するという結論は出されませんでしたが、何らかの情報交換が必要であることは、共通した認識となりました。

9 要約セッション：

IECの中央事務局として今回のコンファレンスをまとめたシェルドン氏から、各セッションの要約が紹介されました。その後、IEC、ISO、ITU-Tの各責任者から最後の挨拶が行われ、コンファレンスは終了しました。

コンファレンス後にICT関連の調整会議

今回のコンファレンスは、ホームネットワークに関係するIEC/ISO/ITUの標準化グループの役員が初めて一堂に会した機会でした。コンファレンス終了後に、今後の国際標準化の進め方について議論するべく、集まることになりました。

ITU-Tでは、幾つかのSGがホームネットワークの主導グループであると主張していることから、それを調整するためのJCA（前出）が既に活動を開始しています。今回の会合では、IEC/ISO/ITUがホームネットワークをそれぞれ重要な課題であると認識していることから、簡単に結論がでる議題ではありませんでしたが、既にあるJCAを上手く活用すべきということで合意することができました。

一方、フォーラム／コンソーシアムなどの団体にとっては、それらが開発した規格書を国際標準化する時に提出する団体は、複数から選択できる方がよい場合もある。現状では、標準化団体間でオーバーラップが全く無い状況を作り出すのが最良であるとは言えない、との意見も出されました。この分野の標準化については、IEC/ISO/ITUでそれぞれの得意分野の標準化を進め、重複作業が確認された段階で、JCAなどを通して調整を行うことになると予想されます。

最後に

今回のWSC主催によるICTコンファレンスでは、準備の最初の段階から参加し、一時期は毎週のように午後10時からの電話会議に参加し、多くの時間を費してきました。2月の本番では、セッションの司会、パネリストとして参加することができました。

また、JEITA/AV&IT標準化運営委員会、JSA/IEC活動推進会議やITU-T国内関係者に、キーノートスピーカ、あるいはパネリストとして参加を依頼し、快く引き受けていただきました。各社の役員クラスへのコンファレンス参加依頼に対しても同様でした。この場をお借りして、ご協力いただいた方々にあらためて感謝させていただき、報告を終わりにすることにします。

刊行物のご案内　「AV主要品目世界需要予測 ～2010年までの需要展望～」

購入はホームページから　http://www.jeita.or.jp/japanese/public/list/detail.asp?id=26&cateid=2

■発行：2006年2月（A4判119頁）■頒価：会員　10,000円、会員外：20,000円　■作成：JEITA／総合企画部調査グループ

「電子機器予測・統計専門委員会」のAV世界需要予測WGが取りまとめた、2010年までのAV機器主要品目の世界需要予測です。
カラーテレビ（CRT）、録画再生機器（VTR・DVD）、ビデオ一体型カメラ、ホームオーディオ（ステレオセット・据置アンプ・CDラジカセ）、カーAVC（カーCD、カーカセット、カーナビゲーションシステム）について、世界51ヶ国・地域の需要予測を行っています。
また、フラットパネルテレビ（液晶・PDP）、プロジェクションテレビ、ホームシアター音響システム、アンプ、カーDVDの主要国・地域別世界需要と、日本の地上デジタル放送受信機器（デジタルテレビ機種別、デジタルチューナ、デジタルチューナ内蔵DVDレコーダ、ケーブルテレビ用STBなど8品目）の国内需要についても予測しています。